

## 日本の火山活動概況 (2004年1月~2月)

気象庁

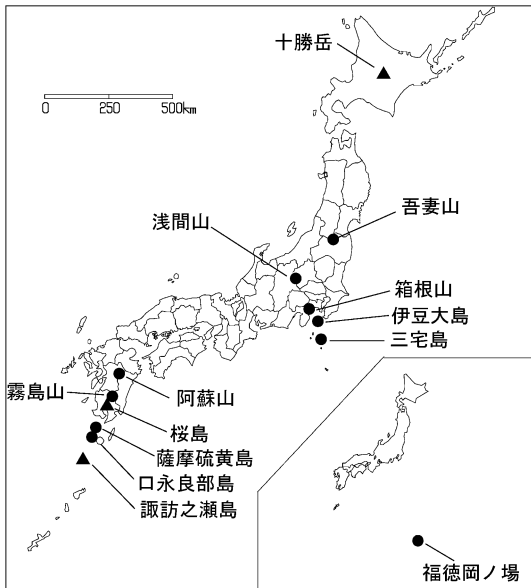


図 1. 2004年1月~2月に目立った活動があった火山。

- ▲: 噴火した火山
- : 観測データ等に変化があったその他の火山

## 【噴火した火山】

## ▲十勝岳 (43°24'56"N, 142°41'25"E)

※各火山の位置は日本測地系による。

2月25日の夜間に、ごく小規模な噴火が発生した。

2月25日21時07分頃から振幅の小さな微動が発生し、その直後から62-2火口(後述する1962年の噴火の際に形成された火口の1つ)の噴煙が火山灰混じりの有色噴煙になるのが観測された。噴煙の高さは火口縁上200~300mで、東に流れていた(図2)。有色噴煙の噴出は翌26日に入っても継続していたが、26日01時過ぎに悪天のため確認できなくなった。振幅の小さな微動は26日05時前に収まった。

天候が回復した28日の日中には噴煙は既に白色に戻っており、摺鉢火口(62-2火口の北東約1km)周辺の雪面に降灰の痕跡とみられる、やや灰色がかった汚れが認められた。なお、聞き取り調査によると、風下側にあたる新得町の山麓では降灰等は確認されなかった。

今後も同様の現象が繰り返される可能性はあるが、現在のところ火山活動が活発化することを示す観測データはない。

十勝岳は北海道の中央部に位置し、歴史時代にしばしば大きな噴火を引き起こしてきた活動的な火山である。1926年(大正15年)の噴火では、中央火口丘の半分が破壊される大爆発が起こり、高温の岩屑なだれが残雪の上に広がったため、雪が融けて大規模な火山泥流が発生した。泥流は美瑛川と富良野川を流下し、25km下流の上富良野村を襲い144人の犠牲者を出した。その後も1962年(昭和37年)、1988年~89年(昭和63年~64年・平成元年)に噴火活動があり、前者では山頂付近の硫黄鉱



図 2. 十勝岳 2月25日夜の噴煙の状況(62-2火口の北北西約6kmに設置した高感度カメラによる) 上: 微動発生前(2月25日20時28分頃), 下: 微動発生中(2月25日22時18分頃)。噴煙の勢いや高さに変化はなかったが、微動発生後に白色噴煙が火山灰混じりの有色噴煙に変わった。

山の事務所が火山岩塊に破壊され5人が死亡した。噴煙は12,000mの高さに達し、降灰は北海道東部一帯に及んだ。後者では火砕流や泥流が発生したが、小規模なものであったため特に大きな被害はなかった。

2004年2月現在、気象庁は地震計を6か所、空振計を2か所、GPSを3か所、監視カメラを1か所に設置して火山活動の状態の把握に努めている。

▲桜島 (31°34'25"N, 130°39'40"E)

従来からの南岳山頂での噴火が継続したが、比較的静穏であった。

噴火は1月12日、2月20日(2回)の計3回で、桜島としては比較的静穏な火山活動であった。1月12日の噴火は爆発で、少量の噴石が8合目まで飛散し、鹿児島地方気象台(南岳の西南西約11km)では誰にでも感じる程度の空振を観測した。この爆発による噴煙の状況は、中量の灰白色の噴煙が火口縁上800mまで上がったところで雲に入ったため、高さの最高は不明である。2月20日07時20分の噴火では灰白色の噴煙が火口縁上1,000mまで上がった。同日19時13分に発生した爆発では、鹿児島地方気象台では誰にでも感じる程度の空振を観測した。この爆発による噴煙の状況は雲のため不明である。なお、鹿児島地方気象台では2003年11月19日を最後に降灰は観測されていない。

地震は総じて少ない状態であったが、2003年12月末から1月上旬に、桜島南西岸から沖合にかけての深さ5~9kmを震源とするA型地震が多くなった。桜島ではA型地震が多発した後しばらくして噴火活動が活発化する事例(例えば1973年、1994年など)があり、今後火山活動が活発化する可能性もある。

また、2月下旬にはB型地震が一時的に増加した。その後の3月上旬に噴煙活動がやや活発化し、間欠的に火山灰が混じった有色噴煙(灰白色)を上げた。有色噴煙の高さの最高は700mで、一部の噴煙の噴出に伴い空振が発生したがその振幅は小さく、気象庁が桜島の噴火・爆発として計数している規模の活動とはならなかった。桜島ではマグマが火道内の浅いところまで上昇した時にB型地震が群発し、その後の数時間~1、2週間に噴火活動が活発化する事例が知られている。今回の活動も規模は小さいものの、同様の現象とみられる。

▲諏訪之瀬島 (29°38'05"N, 129°42'58"E)

小規模な山頂噴火が継続した。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、1月2日~7日、20日~23日、2月1日、4日~8日に火山灰混じりの噴煙が上がるのが確認された。うち、爆発は1月に7回、

2月に2回発生した(前期間の爆発は11月なし、12月6回)。風向きによっては、島内の集落(御岳の南南西約4km)で微量の降灰があった。

連続微動もしばしば発生しており、やや活発な火山活動が続いた。

【観測データ等に変化があった火山】

●吾妻山 (37°43'56"N, 140°14'52"E)

2003年12月以降、吾妻山北西部の一切経山付近の浅いところを震源とする微小な地震が増加傾向にあり、1月9日~17日、1月22日~30日にさらに増加し、特に1月23日には日回数126回と一時多発した。2月に入ってから、やや多い状態で推移した(図3)。

吾妻山では、1998年6月以降、地震が一時的に多発する活動が繰り返し発生しており、今回の活動もその1つとみられる。

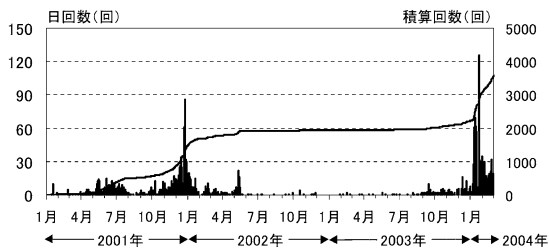


図3. 吾妻山 地震の日回数(折れ線は積算回数) 2001年1月~2004年2月).

●浅間山 (36°24'12"N, 138°31'34"E)

火山活動はやや活発な状態が続いている。

地震活動は、2000年9月以降、微小な地震の発生回数がやや多い状態が続いている。特に2003年6月末頃からは回数がさらに多くなっており、今期間の1日当たりの回数は30~80回程度、月回数は1月1,565回、2月1,993回であった(前期間の月回数は11月1,314回、12月1,203回)。地震の月回数が1,900回を超えたのは1975年7月の1,976回以来である。

また、2003年4月以降、微動の発生回数が多い状態にあり、今期間の月回数は1月6回、2月11回であった(前期間は11月17回、12月10回)。いずれの微動も振幅が小さく継続時間が短い規模の小さいものであり、これらの発生に伴い噴煙活動等に変化はなかった。

山頂火口内の噴気孔周辺では、2002年6月の火山活動活発化以降、群馬県林務部が火口縁に設置している赤外カメラにより高温部が確認されてきたが、高温部の面積は徐々に縮小してきている。また、噴煙活動も1998年~2000年頃の落ち着いた状態に戻つつある。

GPS 観測によると広域の地殻変動には特段の変化はみられなかった。

#### ●箱根山 (35°13'48"N, 139°01'26"E)

2月4日14時過ぎから大涌谷周辺を震源とする地震が多発し、4日の地震回数は80回となった。活動は一時的で、同日22時以降には低下した。最大規模の地震はM3.0(2月4日16時38分)で、箱根町湯本で震度2を観測した他、神奈川県と静岡県の一部で震度1を観測した。

神奈川県温泉地学研究所の調査によると、この地震活動に関して大涌谷の噴気の状態に異常な変化はなかった。また、国土地理院が周辺で行っているGPS観測や、気象庁が湯河原で行っている体積歪計による観測でも、異常な地殻変動はみられなかった。

今回地震が多発した地域では、2001年6月末～10月にも地震が多発したことがあり、この時には、噴気活動の活発化と微小な地殻変動が観測されている。

#### ●伊豆大島 (34°43'17"N, 139°23'52"E)

2月26日～27日及び3月2日に一時的に地震活動が活発化した。震源はいずれも島内北西部であった。微動は発生しなかった。また、噴煙活動や火口内の状況には変化はなかった。

2月26日からの活動では、26日16時頃から地震が増え始め、深夜から翌27日早朝にかけて伊豆大島町元町で震度1となる地震が6回発生した(伊豆大島周辺を震源とする地震で震度1以上を観測するのは2003年9月25日以来)。活動は27日の昼頃までには低下した。最大規模の地震はM2.5(26日23時00分)、地震回数は26日107回(うち震度1を観測した地震が2回)、27日358回(同4回)であった。

この地震活動に伴い、26日23時頃から、震源付近に設置されている体積歪計で伸びの変化が観測された。一方、GPSによる地殻変動観測では特に変化は観測されなかった。

その後も地震はやや多い状態が続いていたが、3月2日05時頃から再び活発化し、09時頃には低下した。2日の地震回数は169回で、震度1以上となる地震は発生しなかったが、震源付近では揺れが感じられた。また、06時頃から体積歪計で伸びの変化が観測されたが、2月26日より小さいものであった。

今回の活動域周辺では1998年8月にも一時的に地震活動が活発化したことがある(図4)。

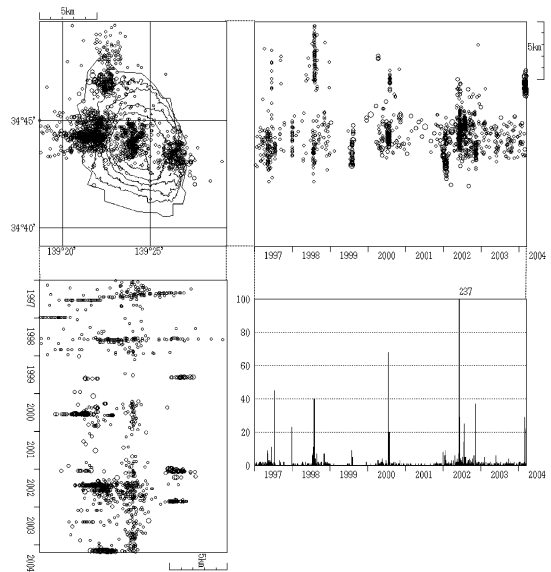


図4. 伊豆大島周辺の地震活動(1997年1月1日～2004年3月10日、気象庁及び東京大学地震研究所のデータを利用した)。

(左上) 震央分布

(左下) 震央の時空間分布(東西断面)

(右上) 震央の時空間分布(南北断面)

(右下) 震源が求めた地震の回数

伊豆大島では山頂直下及び北西側、西側、東側山麓の地下で地震が発生している。山頂直下の地震活動は比較的長く続き、一方山麓の地震活動は1年～数年に一度、短期間にまとまって発生している。

#### ●三宅島 (34°04'43"N, 139°31'46"E)

火山ガスの放出量は長期的には減少しているものの、依然多量の二酸化硫黄の放出が続いている。

噴煙活動が引き続き活発で、白色の噴煙が山頂火口から連続的に噴出した。期間中の噴煙の高さの最高は火口縁上1,200mであった(前期間の最高は1,000m)。上空からの観測<sup>1)</sup>では、火山ガスを含む青白い噴煙が火口上空から風下に流れているのが確認され、二酸化硫黄の放出量は日量2,800～14,000トンと依然多い状態にあった(図5)。

火口内の噴気孔周辺の温度観測より地下浅部の温度は依然として高い状態にあるとみられるが、全磁力の連続観測では特に変化はないことから、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

山頂直下の地震活動は、やや低周波の地震が2003年4月以降多い状態で推移しているが、これに関してその他の観測データに特段の変化はない。

GPSによる地殻変動観測では特に異常な変化はみら

れなかった。

<sup>1)</sup>1月6日, 20日, 2月3日, 9日, 17日, 24日に, 航空自衛隊, 東京消防庁, 陸上自衛隊, 警視庁, 海上保安庁の協力により, 気象庁, 産業技術総合研究所及び大学合同観測班が実施。

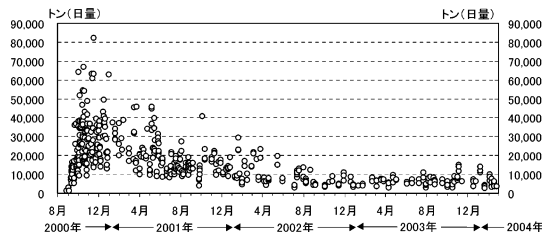


図 5. 三宅島 二酸化硫黄の放出量 (日量に換算) (2000年8月～2004年2月). 最盛期の2000年秋～冬にかけては日量5万トンを超えることもあった。2001年以降は長期的には低下傾向が続いているが, 2002年秋以降の1年あまりは日量3千～1万トンでほぼ横ばいとなっている。

●福徳岡ノ場 (24°17.0'N, 141°29.1'E)

海上保安庁第三管区海上保安本部が行った上空からの調査によると, 1月26日には福徳岡ノ場付近の海面に, 最大幅約150mで, 西北西の方向に約1km延びる, 帯状の薄い黄緑色の変色水が確認された。また, 2月16日には福徳岡ノ場付近の海面に, 最大幅約200mで南の方向に約500m広がる, 薄い黄緑色の変色水が確認された。いずれの場合にも軽石等の浮遊物はなかった。

福徳岡ノ場は東京の南約1,200kmにある南硫黄島の北東約5kmの海底火山である。20世紀中には1904年～1905年, 1914年, 1986年の噴火で火山島を出現させたが, いずれも海水に浸食されて消滅している。付近海面では, 1972年以来毎年, 変色水が確認されている。

●阿蘇山 (32°52'51"N, 131°06'23"E)

中岳第一火口の浅部の熱活動が高まっており, 1月14日に規模の大きな土砂噴出が発生した。

1月14日15時41分頃, 中岳第一火口で規模の大きい土砂噴出が発生した。同時に白色噴煙の噴出が強まり, 一時火口縁上800mまで上がるのが観測された。また, 継続時間37秒のやや振幅の大きい微動が発生した。規模の大きい土砂噴出の発生は2003年7月10日以来である。

当日及び翌15日に行った現地観測や, 15日に九州地方整備局の協力で行った上空からの観測によると, 中岳第一火口の湯だまりは黒灰色に変色し, 湯だまりから高

さ約5mの土砂噴出が断続的に発生していた。火口壁の全面には黒色の噴出物が付着しており, 火口縁の南東及び南西方向の積雪も噴出物により黒く変色していた(図6)。また, 中岳第一火口の東南東約8kmの阿蘇郡高森町上色見地区で微量の降灰を確認した。火口縁の変色が2方向にあり, 南東側は広範囲が淡く, 南西側は狭い範囲が濃いのは, 土砂噴出が南西方向に最も強く噴き出し, 当時吹いていた西北西の風により火山灰が東南東方向に流されたためと考えられるが, 詳細は不明である。

中岳第一火口の湯だまり<sup>2)</sup>の状況は, 1月14日に規模の大きい土砂噴出が発生して以降, 湯だまりから高さ約5mの土砂噴出が断続的に発生している。湯だまりの表面温度は赤外カメラによる観測で80℃程度と, 依然として高い値で推移している。湯だまり量は, 熱活動の高まりを反映して2003年6月以降減少を続けており, 2004年1月4日以降は約4割になっている。

噴煙の状況は, 期間を通して白色で, 噴煙の高さは規模の大きい土砂噴出直後の火口縁上800mを除くと300～500mで, 通常と比べ変化はなかった。

微動の発生状況については, 連続微動は観測されなかったが, 孤立型微動は2003年9月から多発しており, 1月の月回数は7,777回, 2月は5,526回であった(前期間は11月7,197回, 12月5,869回)。

地震活動は, 2月にB型地震の発生がやや多かった他はA型地震の発生回数は少なく, GPSによる地殻変動観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

<sup>2)</sup>湯だまり: 活動静穏期の中岳第一火口内には, 地下水などを起源とする約50～60℃の緑色のお湯がた

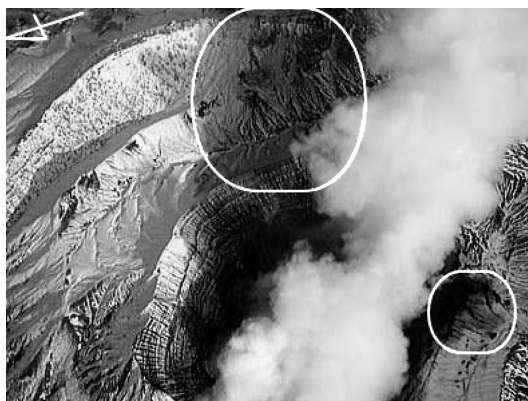


図 6. 阿蘇山 1月14日に発生した規模の大きい土砂噴出の翌日の中岳第一火口の状況(九州地方整備局の協力により撮影)。火口壁全面及び火口縁の南東側と南西側(白丸で囲った部分)が噴出物により黒く変色している。

まっております、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起り始めることが知られている。

### ●霧島山 (31°55'51"N, 130°51'50"E)

御鉢の噴気活動は、消長を繰り返しながら収まってきた。

御鉢では、2003年12月12日に継続時間が40分<sup>3)</sup>と長い微動が発生し、御鉢火口内に新たに生成した2か所の新しい噴気孔から活発な噴気活動が発生した。また、微小な地震がやや多くなった。噴気は同年12月18日に火口縁上300mまで上がったのを最高に収まる傾向がみられ、地震の発生回数も少なくなっていたが、2004年1月3日に継続時間<sup>3)</sup>が55分と長い微動が発生し、一時的に噴気及び地震の活動が再活発化するなど、火山活動は消長を繰り返した。

その後も噴気活動は継続しているが、噴気が火口縁を越える頻度は1月下旬には少なくなり、2月には一度もなかった。地震や微動の発生状況は低調であった。また、GPS観測による広域の地殻変動の状況や、全磁力観測による地下の熱的な状態から、マグマの上昇等の顕著な火山活動の兆候はみられなかった。

なお、新燃岳付近の火山活動は静穏な状態であった。

<sup>3)</sup>東京大学地震研究所の高千穂西観測点における観測。

### ●薩摩硫黄島 (30°47'22"N, 130°18'27"E)

期間中、噴火は発生しなかったが、活発な噴煙活動が継続しており、噴煙の高さの最高は火口縁上600mであった。また、連続微動も観測された。

### ●口永良部島 (30°26'11"N, 130°12'57"E)

2月に微小な地震が多発し、微動も多くなった。

2月1日12時頃から微小な地震が多くなり、翌日には日回数が70回と多発した。その後も増減を繰り返しながらやや活発な状態で推移し、2月の月回数は315回となった(2003年の月回数は73~160回、2004年1月は164回)。口永良部島では、微小な地震の活動が1999年7月~2000年3月に活発化し、その後は少なくなっていたが、2003年2月以降やや多い状態で推移していた(図7)。

また、2003年2月以降に観測されるようになった微動が2月2日の地震多発以降多くなり、月回数は48回となった(前期間の2002年11月は3回、12月は4回、今

期間前半の1月は2回)。

上空からの観測<sup>4)</sup>、機動観測及び上屋久町役場口永良部島出張所が確認したところによると、これらの地震や微動の活動の活発化に関して新岳や古岳の山頂周辺の地熱の状況に特段の変化はなく、噴気は白色・少量で通常と変わらず、新たな噴気活動の発生もなかった。

また、機動観測で行ったGPSによる地殻変動観測では、前回観測時(2003年5月)から今回(2004年2月)までの間に火山活動の活発化を示す顕著な変化はみられなかった。

<sup>4)</sup>2月3日、16日、26日に、鹿児島県、海上自衛隊鹿児島航空基地、九州地方整備局の協力により実施。

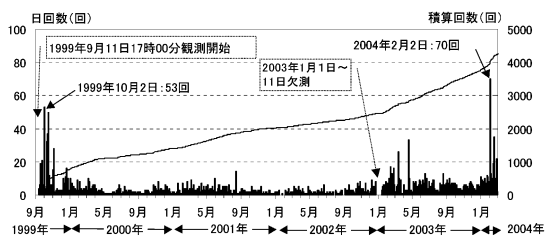


図 7. 口永良部島 地震の日回数(折れ線は積算回数)

(1999年9月11日~2004年2月29日)

(文責: 気象庁火山課 菅野智之)

### ○教官公募のお知らせ

【鹿児島大学理学部地球環境科学科】

- 職名・人数: 助教授(島弧火山講座)1名
- 公募分野: GPSやVLBIなど新たな計測技術を用いるとともに、歪計や傾斜計による観測を通じて、プレート運動の揺らぎや大陸に対する相対運動などの広域の変動、および火山噴火や内陸地震活動と関連する局地的変動などを研究し、学生の測地測量教育に携わることができる方。特に、地震学・火山物理学的な視点から、九州~南西諸島域における地殻変動観測を実践できる方を望みます。
- 応募資格: 45歳以下で博士の学位を有すること
- 着任希望時期: 2004年7月1日
- 応募書類
  - 履歴書
  - 業績リスト(レフェリーを通った論文とそれ以外のものを区別して下さい)
  - 主要論文5編程度の別刷あるいはコピー
  - 所見を伺える方1~2名の氏名、連絡先等
  - これまでの教育・研究実績と鹿児島大学赴任後の教

育・研究の計画・抱負等を A4 用紙 1~2 枚にまとめて下さい。

6. 応募の締切: 2004 年 5 月 17 日 (月) 必着

7. 応募書類の送付先 及び問い合わせ先:

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35

鹿児島大学理学部地球環境科学科 角田寿喜

E-mail: kakuta@sci.kagoshima-u.ac.jp

Tel: 099-285-8149 Fax: 099-259-4720

応募書類は必ず書留郵便で、封筒には「公募書類」と朱書して下さい。

8. 地球環境科学科担当の教員構成 (アイウエオ順)

(2004 年 3 月 10 日現在)

(地質科学講座)

教授: 岩松 暉\*, 大塚裕之, 富田克利, 助教授: 井村隆介, 助手: 山本啓司

(島弧火山講座)

教授: 上野宏共\*, 角田寿喜, 田中 穰\*, 助教授: 小林哲夫, 宮町宏樹

(環境解析講座)

教授: 市川敏弘, 坂元隼雄, 助教授: 富安卓滋, 山本温彦, 助手: 穴澤活郎

(多様性生物講座)

教授: 鈴木英治, 山根正気, 助教授: 佐藤正典, 富山清升, 宮本句子, 助手: 相場慎一郎

(\* 2004 年 3 月 31 日定年退官予定)

なお、赴任後は、共通(教養)教育、ならびに大学院博士前期(修士)および後期(博士)課程の教育と研究指導にも携わっていただくことになります。

【国立大学法人大阪大学大学院理学研究科】

1. 職種・人員: 教授・1 名

2. 専門分野等: 地球科学(実験系)

当専攻は、宇宙・惑星・地球など幅広い時間空間に起こる自然現象や生命系までを含むさまざまな物質の極限状態を、物理学を基礎として解明し、伝統的な天文学や地球惑星科学とは異なる視点からの宇宙地球科学の構築を目指して研究教育を行っています。この趣旨を踏まえて、地球科学(実験系)の分野で新しい研究グループを立ち上げて率いていく、意欲ある方を希望します。

3. 着任時期: 決定後できるだけ早い時期

4. 応募資格: 博士号を取得していること

5. 提出書類

(1) 履歴書(国内外の学会活動, 受賞歴, 科研費等の獲得歴, 参加しているプロジェクト研究歴などを含む)

(2) 研究業績リスト(査読つき学術論文, 査読のない論文・総説など, 著書, 解説・報告書に区分して下さい)

(3) 主要論文 5 篇の別刷もしくはコピー(研究業績リストに○印を付して下さい)

(4) これまでの研究経過(2000 字程度)

(5) 研究グループとしての研究・教育に関する今後の計画と抱負(2000 字程度)

(6) その他特記すべき事項

(7) 意見を伺うことのできる方 3 名以内の氏名・所属と連絡先(電話・e-mail など)

6. 公募締切: 平成 16 年 6 月 9 日(水) 必着

7. 書類送付先:

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-1

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻

専攻長 川村 光

電話: 06-6850-5543 ファックス: 06-6850-5494

e-mail: kawamura@ess.sci.osaka-u.ac.jp

8. 照会先:

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻 土山 明

電話: 06-6850-5800 ファックス: 06-6850-5480

e-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp

当専攻のホームページ:

<http://www.ess.sci.osaka-u.ac.jp/index-jp.html>

※封筒に「教官公募書類在中」と朱書し、簡易書留または書留で送付のこと

【北海道大学大学院理学研究科】

(その 1)

1. 職種・人員・専攻分野: 地球惑星物質圏科学講座, 教授 1 名, 地球化学

2. 応募資格: 博士号を取得していること

3. 着任予定時期: 決定後できるだけ早い時期

4. 応募書類

イ) 履歴書(内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)

ロ) これまでの研究経過(2,000 字程度)

ハ) 研究業績目録(和文のものは和文で表記すること)

A. 査読のある原著論文

B. 査読のない論文, 総説など

C. 著書

D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの

ニ) 主な原著論文の別刷または著書 10 篇以内(複写可)

- ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負 (2,000 字程度)  
 へ) 応募者について照会が可能な方 2 名の氏名と連絡先

5. 応募締め切り: 2004 年 5 月 31 日 (月) 必着. 封筒の表に「教員公募関係」と朱書し, 簡易書留にて郵送すること. また, 公募書類中の第 1 ページに応募先講座名を明記すること.
6. 書類の送付先及び問い合わせ先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻 鈴木徳行  
 電話: 011-706-2730 FAX: 011-746-0394  
 電子メール: suzu@ep.sci.hokudai.ac.jp

## (その 2)

1. 職種・人員・専攻分野: 地球惑星進化科学講座, 教授 1 名, テクトニクス
2. 応募資格: 博士号を取得していること
3. 着任予定時期: 2005 年 4 月 1 日
4. 応募書類
- イ) 履歴書 (内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)
- ロ) これまでの研究経過 (2,000 字程度)
- ハ) 研究業績目録 (和文のものは和文で表記すること)
- A. 査読のある原著論文  
 B. 査読のない論文, 総説など  
 C. 著書  
 D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの
- ニ) 主な原著論文の別刷または著書 10 篇以内 (複写可)
- ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負 (2,000 字程度)
- へ) 応募者について照会が可能な方 2 名の氏名と連絡先
5. 応募締め切り: 2004 年 7 月 12 日 (月) 必着. 封筒の表に「教員公募関係」と朱書し, 簡易書留にて郵送すること. また, 公募書類中の第 1 ページに応募先講座名・職種を明記すること.
6. 書類の送付先及び問い合わせ先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻 中川光弘  
 電話: 011-706-3520 FAX: 011-746-0394  
 電子メール: nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

## (その 3)

1. 職種・人員・専攻分野: 地球惑星進化科学講座, 助

教授 1 名 (年限付き), 地球環境復元や地球表層圏における物質循環に関する古海洋学, 生物・有機地球化学. 備考: 2009 年 3 月 31 日までの年限付きで, 統合国際深海掘削計画 (IODP) を推進するための下記の活動に積極的に関わる方. ある程度の英会話能力と日本語会話能力が必要. 1) 日本地球掘削科学コンソーシアムの運営や活動への参画と支援. 2) 北大北キャンパスに設置された IODP Management International, Inc. (IMI) 札幌オフィスとのリエゾン的役割.

2. 応募資格: 博士号を取得していること
3. 着任予定時期: 2004 年 10 月 1 日
4. 応募書類
- イ) 履歴書 (内外の学会活動, 受賞歴, 参加しているプロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)
- ロ) これまでの研究経過 (2,000 字程度)
- ハ) 研究業績目録 (和文のものは和文で表記すること)
- A. 査読のある原著論文  
 B. 査読のない論文, 総説など  
 C. 著書  
 D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの
- ニ) 主な原著論文の別刷または著書 5 篇以内 (複写可)
- ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負 (2,000 字程度)
- へ) 応募者について照会が可能な方 2 名の氏名と連絡先
5. 応募締め切り: 2004 年 6 月 14 日 (月) 必着. 封筒の表に「教官公募関係」と朱書し, 簡易書留にて郵送すること. また, 公募書類中の第 1 ページに応募先講座名・職種を明記すること.
6. 書類の送付先及び問い合わせ先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻 中川光弘  
 電話: 011-706-3520 FAX: 011-746-0394  
 電子メール: nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

## (資料)

地球惑星科学専攻 教員構成 (2004 年 4 月 21 日現在)

- ・地球惑星物質圏科学講座  
 教授: 藤野清志, 小笹隆司, 中川光弘, (本公募 1), 助教授: 新井田清信, 橋元明彦, 角皆 潤, 永井隆哉, 講師: 三浦裕行, 助手: 中川書子
- ・地球惑星進化科学講座  
 教授: 岡田尚武, 鈴木徳行, 在田一則 (2005 年 3 月退

職予定: 本公募2), 助教授: 川村信人, 西 弘嗣, (新規: 本公募3), 講師: 沢田 健, (別途選考中), 助手: 岩田圭示, 前田仁一郎

•地球惑星流体科学講座

教授: 播磨屋敏生 (2005年3月退職予定: 別途公募中), 渡部重十, 林 祥介, 助教授: 知北和久, 見延庄士郎, 倉本 圭, 講師: 遊馬芳雄, 助手: 小高正嗣

•地球惑星物理科学講座

教授: 小山順二, 蓬田 清, 池田隆司, 日置幸介, 助教授: 森谷武男, 笹谷 努, 前田 亟, 助手: 吉澤和範

•地震火山研究観測センター (協力講座)

教授: 島村英紀 (2005年3月退職予定: 別途公募予定), 笠原 稔, 岡田 弘, 助教授: 高波鐵夫, 茂木透, 大島弘光, 谷岡勇市郎, 橋本武志, 助手: 山本明彦, 勝俣 啓, 高橋浩晃, 村井芳夫, 森 濟, 西村裕一, 青山 裕

•総合博物館 (教育協力)

教授: 松枝大治, 助教授: 箕浦名知男

なお, 教育・研究にあたっては上記の講座制にかかわらず, 研究室・グループ制で運営されており, その構成は変更が可能です。また全教官は, 大学院教育のほか, 全学教育・学部教育も担当しています。

○研究員募集のお知らせ

【京都大学防災研究所・産学官連携研究員】

1. 公募人員: 産学官連携研究員 1名
  2. 所属: 地震予知研究センター
  3. 公募分野: 大都市大震災軽減化特別プロジェクトのうち本研究所の担当する「大都市圏地殻構造調査研究・地震動(強い揺れ)の予測」において, 共同して研究の推進を行う人材を求めています。主として, 断層の準静的モデル等の構築と歪蓄積過程に関する研究を推進できる方の応募を期待しています。
  4. 応募資格: 採用時に博士の学位を有するか, その予定の者。
  5. 任用期間: 年度ごとの更新で平成16年度末まで。研究継続状況により最大平成18年度末まで。
  6. 雇用条件: 週40時間勤務(日々雇用職員待遇)。給与は大学の規定による。
  7. 採用時期: 決定次第できるだけ早い時期
  8. 提出書類: 次の(1)~(6)の各一式
- (1) 履歴書
  - (2) 研究業績リスト(査読の有無に分類, 投稿中の論文を含む)
  - (3) 主要論文の別刷り3編(学位論文は要旨のみ), プレプリントも可

- (4) 研究業績の概要(A4用紙2000字程度)
- (5) 今後の研究計画(A4用紙2000字程度)
- (6) 応募者について意見を伺える方2名の氏名と連絡先(含むe-mailアドレス)

9. 問合せ先: 京都大学防災研究所地震予知研究センター 橋本 学

Tel: 0774-38-4191 Fax: 0774-38-4190

E-mail: hasimoto@rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp

なお, 大大特に関しては, 下記URLをご参照ください。

<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/dai2/dai2.html>

10. 公募締切: 平成16年4月20日(火)必着

11. 書類提出先: 〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄  
京都大学防災研究所地震予知研究センター  
橋本 学宛

封筒の表に「連携研究員応募書類在中」と朱書きし, 郵送の場合は書留とすること。

○WPGM 2004

今年の8月16-20日にハワイで開催されるWPGM 2004では, 現在講演受付を行っています。

火山関係のセッションも多数予定されていますので, 皆様奮ってご参加下さい。WPGM2004の詳細は

<http://www.agu.org/meetings/wp04/>

でご覧下さい。またセッション一覧は, Preplanned Session Search

[http://submissions6.agu.org/wp04/search/search\\_submit.asp](http://submissions6.agu.org/wp04/search/search_submit.asp)

で, デフォルトの「Sponsor: List All Sessions」のまま検索すればご覧いただけます。

○Western Pacific AGU Meeting 2004

VOLCANOLOGY at the Western Pacific Geophysics Meeting, 16-20 August 2004

Please join us in Honolulu for the regional section meeting of AGU. A wide range of volcanological research is represented in the 10 VGP special sessions, listed and described below. See

<http://www.agu.org/meetings/wp04/>

to submit an abstract, and check the web site soon for special events like a Hawaiian luau dinner, community talks, and Oahu field trips.

Important Deadlines

31 March 2004 (new deadline): Deadline for Berkner Travel Fellowship.



15 April 2004: Deadline for abstract submission by postal or express mail.

22 April 2004: Deadline for electronic on line abstract submissions.

22 April 2004: Deadline for Student Travel Grants applications.

V00 Volcanology, Geochemistry, and Petrology General Contributions

V01: Physical Volcanology of Large Igneous Provinces

Convener: James D. L. White and Ian P. Skilling

V02: Volcanic Eruptions: Field Observations, Experimental Constraints, and Integrated Modeling

Convener: Takehiro Koyaguchi and Milton Garces

V03: Ophiolites of the Pacific Rim

Convener: Kirsten Ngaire Nicholson, Dr. and Christian Picard

V04: Silicic Volcanism and Crustal Evolution in Oceanic Arcs

Convener: Yoshihiko Tamura, Osamu Ishizuka, Richard S. Fiske, and Shuichi Kodaira

V05: Modeling Lava Flow Emplacement Dynamics

Convener: Andrew Harris, Jim Kauahikaua, and Scott Rowland

V06: Volatiles in Oceanic Island Basalts

Convener: Jacqueline Eaby Dixon and Michelle Coombs

V07: Large Igneous Provinces and Hot spots in and Around the Pacific Basin

Convener: M L G Tejada and J Mahoney

V08: Non-Earthquake-Generated Tsunamis

Convener: Yuichi Nishimura, Barbara H Keating

V09: Physical Properties, Thermodynamics, and Structure of Silicate Melts and Magmas

Convener: Sharon Webb

V10: Volcano-Hydrologic Processes, Deposits, and Hazards on the Pacific Rim

Convener: Vern Manville

○【シンポジウム「火山ハザードマップの方法論」開催のお知らせ】

世話人: 荒牧重雄・宇井忠英・中村洋一

日本で初めての火山ハザードマップ(防災マップ)が発表されてから、20年経ちました。その間に、約30の火山についてハザードマップが作られました。日本の活動的な要注意火山の大部分が、一応カバーされた段階に達したと考えることが出来ます。この時点で、

これまでに作られたマップについての総括をして、今後の方向を議論するのが適当であると、私たちは考えました。5月8日(土)に、1日をかけて、ささやかなシンポジウムを企画しました。場所は、東京大学地震研究所です。関心をもたれる方々のご参加をお願い申し上げます。

1. 目的

これまで作成された火山ハザードマップの製作過程、内容の特徴、特によい点、不備、問題点などを、各火山ごとにまとめる。それを元に、総括的な議論を行い、これからのハザードマップはどうあるべきかへ向けての討論を行う。

2. 日時・場所

2004年5月8日(土)10時~18時

終了後懇親会(会費制)

東京大学地震研究所 第一会議室(5F)

3. シンポジウムの運営方法

第1部は、各火山ごとに、作成に関与された研究者によるまとめを話していただく。火山の数が多いため、1火山あたり5分くらいしか時間がないが、作成の経緯、よく出来た特徴、不満、不備が残る点の3項目についてまとめていただく。

第2部は、世話人3名が、問題提起をして、自由討論を行う。

4. 出版

長めのアブストラクトを作っていただき、「月刊地球」の特集号として出版を予定。

5. プログラム(案)

【第1部】

各火山についての個別的な総括

【講演予定者】(講演者が多く、現時点で予定のやりくりがつかない方が多いので、候補に挙がっている方々のお名前だけを記します)

勝井義雄, 岡田 弘, 宇井忠英, 林 信太郎, 斉藤徳美, 伴 雅雄, 中村洋一, 平林順一, 荒牧重雄, 小山真人, 早津賢二, 三宅康幸, 藤井直之, 渡辺秀文, 須藤靖明, 渡辺一徳, 小林哲夫, 石原和弘,

【火山名】

北海道駒ヶ岳, 十勝岳, 樽前山, 雌阿寒岳, 有珠山, 恵山, アトサヌプリ, 鳥海山, 岩木山, 秋田焼山, 秋田駒ヶ岳, 岩手山, 蔵王山, 吾妻山, 安達太良山, 磐梯山, 那須岳, 草津白根山, 箱根山, 浅間山, 富士山, 伊豆大島, 三宅島, 新潟焼山, 焼岳, 雲仙岳, 九重山, 阿蘇山, 鶴見岳, 桜島, 霧島山, 鹿児島県の離島

【第2部】

問題提起

- 火山ハザードマップの問題点と今後の課題
  1. 日本で公表されたハザードマップと関係資料のデータベース（中村洋一）
  2. 作成した火山防災マップのアフターケア（宇井忠英）
  3. 防災計画との緊密な関連の必要性（荒牧重雄）
- 総合討論
- 【懇親会】（会議終了後，会費制）

以上

○ **【AOGS (Asia Oceania Geosciences Society) の講演申込締め切り間近】**

アジア・大洋州における地球科学の国際学会 AOGS (Asia Oceania Geosciences Society) の第1回研究発表会が2004年7月5-9日にシンガポールで開催されます。

詳しい情報・論文投稿は下記の URL から。

<http://www.asiaoceania.org/>